



横浜美術館 中高生プログラム2019 美術を体験しよう!伝えよう! [概要]

約5ヶ月にわたる中高生対象の長期プログラム。中高生が横浜美術館コレクション展の作品を通して、様々な美術の見方や楽しみ方を体験し、8月に小学生対象のプログラム「美術をたのしむ!子ども探検隊」を企画、実施した。プログラム終了後、番外編として有志が本誌の編集にあたった。

日程 2019年6月16日 [日]～11月24日 [日]
[本編8回+番外編2回]
会場 横浜美術館8階 | 展示室
対象 中学生、高校生
参加費 500円
参加人数 20名

第1回 | はじめに、美術館との出会いと発見

6月16日 [日] 10:00～14:00
● スタッフ紹介、自己紹介
● プログラムの目的と概要の説明
● 企画展「横浜美術館開館30周年記念 Meet the Collection—アートと人と、美術館」を見学
● レクチャー／展覧会の企画について
講師：庄司尚子 (横浜美術館コーディネーター)
● 今日の発見—スケッチブックの使い方
◎参加人数15名

第2回 | 自分の意図を超えていこう シュルレアリスムをみる・知る・つくる

7月7日 [日] 10:00～14:00
● 対話による鑑賞 講師：齊藤佳代 (鑑賞ファシリテーター)
● レクチャー／シュルレアリスムとは?
講師：端山聡子 (横浜美術館 主任エディケーター)
● ワークショップ デカルコマニーとコラージュ
講師：関 淳一 (横浜美術館 主席エディケーター)
◎参加人数17名

第3回 | アーティストと出会う ① 身体をつかって作品をあじわう

7月28日 [日] 10:00～14:00
● アーティストと出会う 講師：浅井裕介 (画家／「Meet the Collection」展ゲストアーティスト)
● ワークショップ 身体をつかって作品をみる
講師：花崎 暁 (演劇実践家・野口操講師)
◎参加人数18名

第4回 | アーティストと出会う ② 子ども探検隊の準備 ①

8月4日 [日] 10:00～14:00
● アーティストと出会う 講師：土田ヒロミ (写真家／横浜美術館コレクション展出品作家)
● グループワーク「子ども探検隊」ワークショップ検討
◎参加人数15名

第5回 | 子ども探検隊の準備 ②

8月11日 [日] 10:00～14:00
● 小学4～6年生ってどんな感じ?
● グループワーク「子ども探検隊」ギャラリートナー検討、ワークショップ準備
◎参加人数18名

第6回 | 子ども探検隊リハーサル

8月18日 [日] 10:00～14:00
● グループワーク「子ども探検隊」リハーサル、最終準備
◎参加人数20名

第7回 | 美術をたのしむ!子ども探検隊2019

8月25日 [日] 9:30～14:30
● 小学4～6年生のための展示ツアーとワークショッププログラム実施
◎参加人数20名

第8回 | ふりかえり

9月8日 [日] 10:00～12:00
● プログラムの振り返り
● 中学生プログラムを台紙の上に表現する
◎参加人数14名

番外編1 | 記録誌をつくる ①

11月3日 [日] 10:00～12:00
● 記録誌のアイデアを出し合う
◎参加人数12名

番外編2 | 記録誌をつくる ②

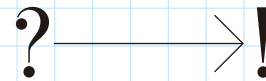
11月24日 [日] 10:00～11:30
● レクチャー／デザインとは?
講師：森上 暁 | 田中あづさ | 高木沙織 (NDCグラフィックス)
● 記録誌のアイデアをプレゼンテーション
◎参加人数13名



美術をたのしむ! 子ども探検隊2019 [概要]

中高生が企画した、小学生と横浜美術館コレクション展を楽しむためのプログラム。中高生がガイドとなり、5グループにわかれて展示室ツアーとワークショップ、ランチ交流を行った。

日時 2019年8月25日 [日] 10:00～14:00
[ランチ交流会を含む]
会場 横浜美術館8階 | 展示室
対象 小学4～6年生
参加費 無料
参加人数 26名



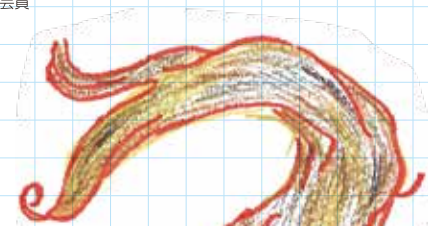
横浜美術館 中高生プログラム2019 美術を体験しよう!伝えよう! [記録誌]

発行にあたって

6 回目の中高生プログラムの舞台は、横浜美術館コレクション展(7月13日～9月1日)であったが、先に開幕した企画展「Meet the Collection —アートと人と、美術館」(4月13日～6月23日)のゲストアーティスト(東芋、浅井裕介、今津景、菅木志雄)のうち3名による作品が含まれるという特徴ある展示内容であった。● 中高生にとって浅井裕介さんが壁に絵を描いた円形の赤い展示室で作家自身から話を聞き、土の絵具で描くデモンストレーションを見たことは印象的だったようだ。写真家の土田ヒロミさんからは「ヒロシマ・モニュメント」シリーズのお話を展示室でうかがうほか、映像作品も見たり、35ミリフィルムのネガにも触れたりした。演劇実践家の花崎暁さんは展示作品から《不安な顔》(宮崎進)を取り上げ、実感を伴い身体を感じることを、身体や声によって感じたことを表わす体験をさせてくださった。シュルレアリスムの回では鑑賞ファシリテーターの齊藤佳代さんと「作品をよくみる体験」で言葉を通じてみることの多様性を体験した。この回はレクチャーやワークショップもあり、シュルレアリスムの多面的な理解へとつながった。プログラム全体の詳細は本文をご覧ください。● さて、これまで実施してきた経験から、本プログラムのプロセスには4段階あると考える。● ①美術や美術館について知り、見方や認識が変容・拡大する。同時にアーティストや専門家、本プログラムに関わるスタッフやボランティアを知る ②展示ツアーとワークショップを自分たちで企画・準備する ③「子ども探検隊」に参加する小学生へ展示ツアーとワークショップをおこなう ④振り返りとまとめの記録誌のアイデアを出す ● ①の段階では、参加者である中高生同士が知り合い、新たな関係が生まれる。スタッフやボランティアとも距離を縮めていく。アーティスト、専門家との出会いやワークショップなどの体験を通じて、美術に関する新たな知見を得る。この段階では中高生プログラムという「場の醸成」、つまり、参加者自身が考え、発言し、考えたことを実施できる場が生成するように運営する。②ではグループ毎に小学生のためのプランを企画し、討議および試行を重ねる。本番の展開、たとえば展示をまず見るのか、ワークショップの一部を先に行うのかなど細部まで討議し、小学生へのプランを試行する。実際に小学生が参加する③になるとグループ内の関係性にも変化が起こる。新たな参加者(小学生)を迎えることで、グループダイナミクス(集団力学)が動き、いっそう互いに協力し補い合って自分達のプランをやり遂げることに注力する。④では経験を振り返り、どのように記録誌に反映させるか討議し、題名を決め、デザイン事務所でデザイナーへ実現したいことを伝えるのである。したがって本記録誌の題名「?→!」や、浅井裕介さんとの出会いを反映した手づくりの表紙も中高生からのリクエストに基づくものである。● ③の大きな山を飛び越えるかのような跳躍を含め、①②③④と各段階を追うごとに、中高生の隠れていた能力と個性がくっきりと顕れる。この記録誌を通して、その様子が伝われば幸いに思う。

横浜美術館 教育普及グループ チームリーダー
主任エディケーター／主任学芸員

端山聡子



はじめに 美術館との出会いと発見

- ◆ 壁に絵をそのまま描いているのを見たのは初めてだった
- ◆ なかなか美術館の作品ではなく空間を意識することは
ないため少し不思議な感じだった
- ◆ 距離についての発見がありました
- ◆ 美術館には沢山の面白い人が多かったのは意外だったが、
自分と同じような趣味の人が多かったのは意外だったが、
とても嬉しかった



壁や天井に注目して展示室の雰囲気を感じる

まだ知らない顔同士のプログラム初回は、少し緊張してそわそわしたムードでスタート。まずは二人一組の「他己紹介」で、お互いにインタビューがあった。全員の紹介が終わったところで、展示室の中へ。企画展「Meet the Collection」で、壁の色や照明といった展示のための工夫、そして作品の種類や大きさに注目しながら、展示室全体の雰囲気をつかんだ。グループに分かれてお昼を食べた後は、横浜美術館学芸グループのコーディネーターである庄司尚子さんのトーク。展示のコンセプトや美術館のコレクションについて詳しく聞き、展示への理解を深めた。



美



自分の意図を超えていこう シュルレアリスムをみる・知る・つくる



齊藤佳代さんと一緒に作品をみる

横浜美術館コレクションの目玉の一つでもあるシュルレアリスム美術を「みる」「知る」「つくる」という三つの角度から味わった。講師の齊藤佳代さんとともに作品を「みる」会場は、入室中の誰もいない展示室。静かな展示室で同じ作品を見ながら、気づいたことをみんなで話す贅沢な時間を過ごした。展示室を出てシュルレアリスムについてのお話を聞いたあとは、「デカルコマニー」と「コラージュ」の技法を使って作品を制作した。ワークショップの中で起こったいろいろな予想外の「出会い」の結果、作った本人もちよっと驚くような作品が完成した。最後に展示室に戻ってもう一度作品を鑑賞。シュルレアリスムの世界にどっぷりと浸る一日となった。



- ◆ 考えなければならない普段の美術と違って
新鮮な思いで参加することが出来た
- ◆ シュルレアリスムの絵は理解することはできない
逆に理解できてしまったらそれはシュルレアリスムではない
- ◆ 考えながら作っていくのではなく、
自分がぼっと思いついた事をつみ重ねてつくりたい

新しい発見

アーティストと出会う① 浅井裕介さん



出品作家・画家の浅井裕介さんのお話

印象的な「赤い壁の展示室」の壁面を手がけた画家の浅井裕介さんと一緒に展示室へ。みんなで作品の目の前に座ってお話を聞いて、特別にそっと壁面に触らせてもらった。展示室を出たあとは、浅井さんが土の絵具で実際に絵を描いていくところを見せてもらうことに。筆だけでなく手も使いながら絵を作り上げていく浅井さんの姿には、全員目が釘付けになった。最後には中高生一人一人が描いた丸も浅井さんの絵の一部となり、一枚の大きな絵が完成した。



隔々まで見たり見る角度を変えることで絵に対する印象が変わってくる
特別に絵をさわらせてもらったが、色によって感触が違った
絵をかかれていた時、まるでのみこまれそうなエネルギーを感じた
生きている作品を何度も見るからすごさ分かる

絵とは不思議なものだと思った



身体をつかって作品をあじわう 花崎攝さん

講師の花崎攝さん



水袋をのせて身体の力を抜き「原初生命体」に戻る

3日目の午後は、花崎攝さんによる身体を使ったワークショップ。温かい水袋を体のにのせて身体の感覚にじっくり意識を向けた後は、お互いの身体を使って色々なテーマを表現する「人間彫刻」を行った。お昼を食べたら再び展示室に向かい、宮崎進の作品《不安な顔》を鑑賞。「この顔の下に身体があったらどんなポーズだろう」「この顔が喋ったらどんなセリフを言うだろう」ということを考え、お互いに発表しあった。



「のびる」というタイトルを表す「人間彫刻」

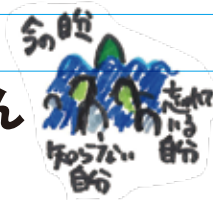
人間も生き物が変わっていった結果で元々は単純な細胞(原初生命体)だ。だから元々は変わっていないくて、まくに包まれた液体だ。そういう意識をときますものが野口体操だった
ねんどになったり、彫刻家のように感じて自分の体が実体のないもののように感じた
相手、人の立場や動きからみてどう表現するのか、その部分にも注目してワークショップにのぞむことができました
からだは生きて水袋



宮崎 進(不安な顔)をみる

この作品が何か喋るとしたら...?
中高生の答え
「かわいい。行きたくない。
ハーもういやだ」
「助けてくれ頼む」
「今から死にいくよ」

アーティストと出会う②土田ヒロミさん こども探検隊の準備①



出品作家・写真家の土田ヒロミさんのお話



土田ヒロミさんの作品シリーズ「Aging」のフィルム



「こども探検隊」のアイデアを出しあう

- ◆ 「カメラは脳の一部」という言葉も心に残った
- ◆ 土田さんの写真は時間の流れを感じる作品が多かった
- ◆ 一瞬を客観的に(?)写すことができる写真だからこそ
- ◆ できる事なのかもしれないと思った
- ◆ 写真の歴史や「なにかを続ける」ことの大切さも教わりました
- ◆ 現在とは何か、自分の状況、多くの情報の中どう生きていくか

これが何故
作品と
成立しているのか

こども探検隊の準備② リハーサル

作品を通して新しい世界を感じてほしい、美術館を身近に感じてほしい、小学生の意見、興味を尊重する美術館を身近な場所、小学生の意見、興味、楽しみ、よくなかったが、一番目につきそうな所のリハーサルがある。

◆ 小学生がくる実感がわいた、楽しみである

◆ 当日助け合っできてよかったのは大変だったし、中々進まない事もあったが、来週は成功させたい

「このものを色んな見え方がある」



展示ツアーの検討



「こども探検隊」の展示ツアーとワークショップの準備、リハーサルを行った。あらためて「小学4～6年生ってどんな感じ?」と話してから展示室をまわると、「小学生の身長ってこれくらい?」「こういう質問がくるかも」など、今までとは違う視点が出てきた。ツアーのシミュレーションを試みたり、自分が担当する作品をじっくり見直してみたり、それぞれが小学生との時間を想像しながら準備を進めた。ワークショップについても、「自分たちが何をやりたいか」だけでなく、参加者である小学生のことを考えてアイデアを練り直した。最後は時間いっぱいまで道具を広げてサンプルをつくり、小学生を迎えるために材料や道具を整えた。



ワークショップの準備



美術をたのしむ! こども探検隊2019



全員で迎えた「こども探検隊」本番の日。元気いっぱいの小学生がやってきて、中高生が準備した展示ツアーとワークショップを体験した。緊張した面持ちで集まった中高生だったが、ときには年上らしく小学生を引っ張り、ときには同じ目線で笑いあい、お迎えからお見送りまでの一日を立派に乗り切った。小学生は自由な発想で作品や素材とふれあいながら、お兄さんお姉さんたちと過ごす時間を楽しんだ。



今津 景《Repatriation》を小学生と一緒にみる

Room Collection

荒井稀柊 | 宇佐美友悠 | 齋田百伽 | 田中ゆう

小学生参加者：5名



中高生お手製のガチャガチャマシンを使いながらテーマを決め、自己紹介をスタート。展示ツアーでは中高生が一人一部屋ずつ担当し、小学生を案内した。みんなで一緒にぐるりと作品を囲んで座り、作品について語り合う場面も。ツアー後は、浅井裕介さんの展示室から着想したワークショップに挑戦。2枚のボードを使って一人ひとりが「自分の部屋」を作り上げた。思い思いの色で塗られた壁と床、そして部屋の中に置かれた色々なものにはそれぞれの個性が表れていた。最後はお互いにつくった作品を発表しあい、それぞれの視点を共有した。

いのちのホ



◆ 興味のある作品「いのちのホ」
◆ 納得するまで何度も質問する姿が印象的だった。この作品は、自分たちが住んでいる部屋を想像して描いた。色や素材も自由に選んで描いた。中には、自分たちが住んでいる部屋を想像して描いた。色や素材も自由に選んで描いた。中には、自分たちが住んでいる部屋を想像して描いた。色や素材も自由に選んで描いた。

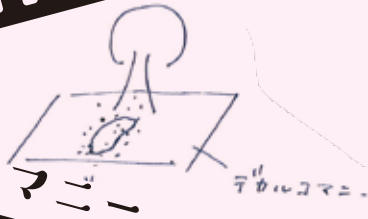


BF

川島一晃 | 白石陽大 | 長谷部ななみ | 本間愛深

小学生参加者：6名

いのちの木とデカルコマニー



なかなかプランが決まらず、リハーサルの日是最後まで残って準備を進めていたグループだったが、当日はお迎えからしっかりと小学生をリードした。ツアーの中では小学生に質問を投げかけつつ、対話をしながら作品と一緒に鑑賞する様子や、小学生のペースに合わせて中高生が臨機応変に役割を交代する様子が見られた。ワークショップでは、シュルレアリスムの手法「デカルコマニー」と独創的な内容にチャレンジ。土台をつくる係と上にのせる立体物をつくる係に分かれて、全員で協力してひとつの作品を作り上げた。



- ◆ 自分より年下の子に美術について教えたことで、気づかなかった発見がたくさんできた(中学生)
- ◆ 最初はみんな緊張しすぎて無口であったが作品を作っているときからだんだん明るい雰囲気になった(中学生)
- ◆ 意見がでにくかったけど作品をよくみて話を聞いてくれた(中学生)
- ◆ 大きな作品を皆でつくって楽しかった(小学生)
- ◆ もっと時間があつたらスゴイものをつくりたい(小学生)



楽しかったです。

スチーム

江澤悠仁 | 北島瑠菜 | 竹永高一郎 | 渡辺和子

小学生参加者：5名

やりたいことが盛りだくさんのこのグループは、ツアーもワークショップも2回に分けてしっかりと取り組んだ。中学生それぞれが好きな作品、紹介したい作品を選び、「作品からのメッセージを受け取って、自分なりに解釈してほしい」という思いをこめて展示ツアーをおこなった。ワークショップのテーマは「絵画と立体でのいのちを表現しよう」。壁画と立体作品を組み合わせて、一人ひとつずつ、ミニチュアの展示室を制作した。途中すこし時間が足りなくなって焦る場面もありつつ、最後は中高生もサポートしながら作品を仕上げた。

時間が短く感じた。

絵画と立体で、いのちを表現しよう



- ◆ 小学生は予想外な作品をつくっていてびっくりした。解説が少し難しく伝わっていなそうだったので悲しかった(中学生)
- ◆ 上手く伝えられたかどうかよかったので悲しかった。かな(中学生)
- ◆ とても楽しく、小学生のひとなかよくすることができました(中学生)
- ◆ 話を聞いて共感を持って絵を見た(小学生)
- ◆ 命、心をイメージして制作。楽しかった(小学生)

The tree of life

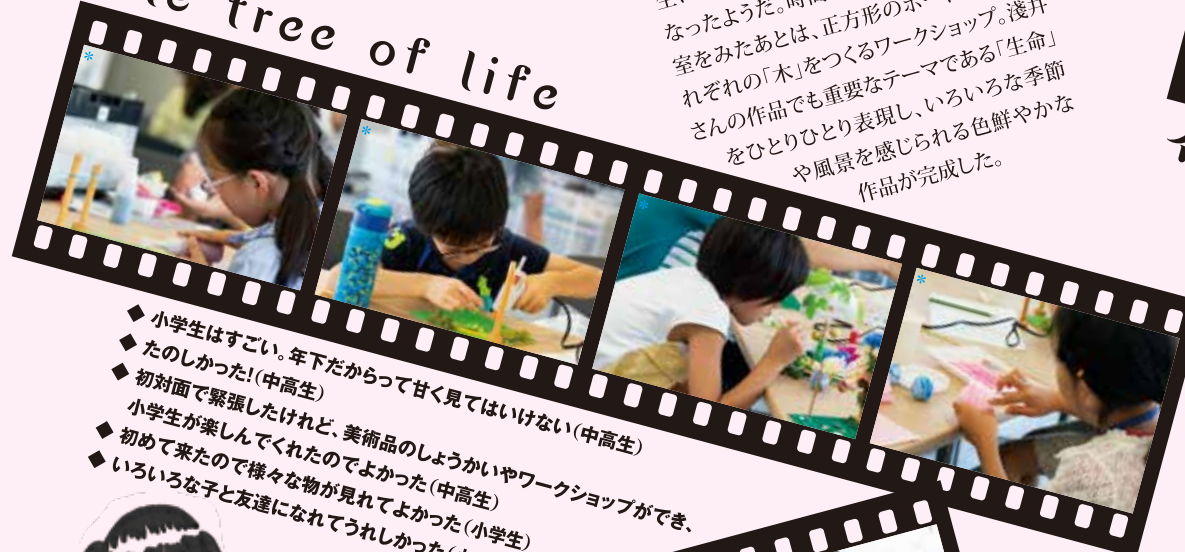
オボニア衣舞花 | 北島優斗 | 木下結菜 | 丸山莉奈

小学生参加者：4名



浅井裕介さんの作品から強くインスピレーションを受け、展覧会冒頭の《いのちの木》をあえて最後にまわるというひと味違う順路で展示ツアーをおこなった。紹介する作品を事前に決めず、その場で小学生が気に入った作品と一緒にみいったため、中高生にとっても発見がいろいろあった。展示室をみたあとは、正方形のボードの上それぞれの「木」をつくるワークショップ。浅井さんの作品でも重要なテーマである「生命」をひとりひとり表現し、いろいろな季節や風景を感じられる色鮮やかな作品が完成した。

The tree of life



- ◆ 小学生はすごい。年下だからって甘く見てはいけない(中学生)
- ◆ たのしかった!(中学生)
- ◆ 初対面で緊張したけれど、美術品のしょうかいやワークショップができ、小学生が楽しんでくれたのでよかった(中学生)
- ◆ 初めて来たので様々な物が見れてよかった(小学生)
- ◆ いろいろな子と友達になれてうれしかった(小学生)



We are the Colorful

大竹美緒 | 田中あい | 村松希祥 | 渡辺朋美

小学生参加者：6名



- ◆ 少し、美術の鑑賞の楽しさを伝えられたか心配です(中学生)
- ◆ 子供はなつく可愛いことを発見。
- ◆ 新しいとびら(?)を広げた一日でした(中学生)
- ◆ 細かいところまで目がいらって流石だなと思った(中学生)
- ◆ いろいろな工夫がされていておもしろかった(小学生)
- ◆ 家に帰っても遊べるからよかった(小学生)

楽しかった。

イメージ~見つけよう新しい世界観~

はじめに「好きな色と名前を覚える」ゲームで仲良くなった後は、みんなで展示室内での約束をしっかりと確認してからツアーに出発。中学生は思い思いのペースで楽しむ小学生の様子を交互にみながら、ひとつひとつ作品の魅力を伝えたり、一緒に図録のページをめくってみたりと、展示室での時間をゆっくりと過ごした。ワークショップは、シュルレアリスムの展示室の「イメージをつなぐ」というテーマから発想を得たもの。丸いプラスチックのカプセルにいろいろなものを詰めたり、他のカプセルとつなげたりすることを通じて、自分の世界観を広げていくような作品を制作した。

イメージをつなぐ



ふりかえり



「中高生プログラム」を台紙に表現する

最終回のこの日は、はじめに「こども探検隊」の日に各グループではどんなことが起きたかを共有しあった。展示ツアーにもワークショップにもグループの個性が出ていて、同じ時間だけどそれぞれ全く違う過ごし方をしていたことが分かった。その後は初回から順番に写真を見ながらプログラムの内容をふりかえった。そして最後に、これまでの発見ノートの発展形として、「中高生プログラム」を一言で表し、その言葉を円形の台紙の上に表現した。(裏表紙に掲載)



プログラムの振り返り



- ◆ この経験を無駄にしたいくない
- ◆ 時間が短く感じた
- ◆ 大人数で制作することで自分にはなかったアイデアも聞けたので面白かった
- ◆ いい意味で、私の中の美術に対する「見方」や「価値観」を中高生プログラム、こども探検隊により壊された

記録誌をつくる①②

記録誌編集会議・デザイン事務所訪問



記録誌の方針やデザインを検討



デザイナーさんに自分たちのアイデアをプレゼン

記録誌の制作のため、11月に2回の番外編を行った。第1回は、編集会議。有志が集まり、どんな冊子にしたいかを話しあった。ホワイトボードいっぱい書かれた「変化」や「成長」、「楽しい冊子」といったキーワードや意見を、自分たちなりにまとめた。第2回はデザイン事務所「NDCグラフィックス」を訪問した。プロのデザイナーさんを前に緊張しながらも、冊子についてのアイデアを自分たちの言葉で伝えることができた。

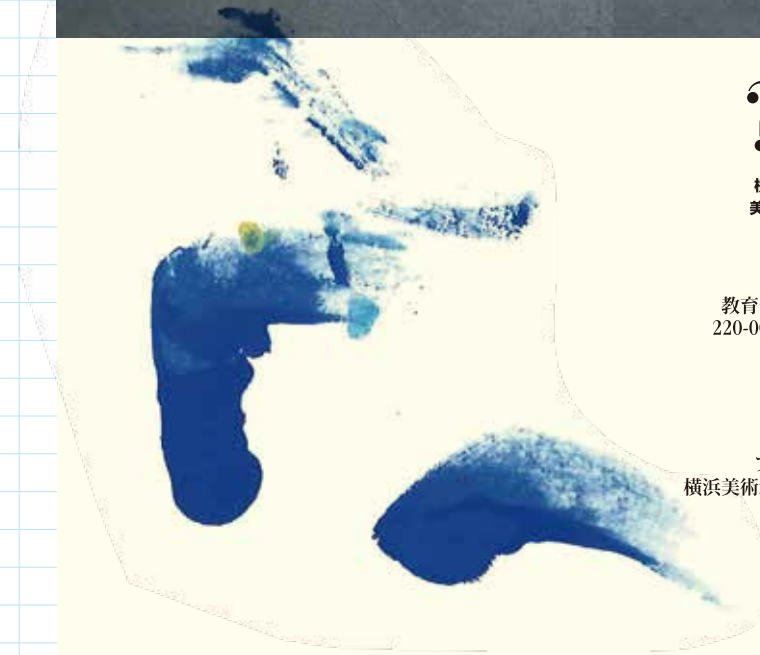
- ◆ 読みやすい楽しい冊子にしたい!
- ◆ 回を追うごとの変化や成長を表したい
- ◆ 自分たちのイラストなどを使って、手作り感のある冊子に
- ◆ 絵を触ったときの手触りを伝えたい

あとがき

プログラム最終日、中高生に「このプログラムを一言で表すと？」という問いかけに答えてもらった。しかし同じ問いに自分が答えようとする、この質問がいかに難しいものであるか実感する。色々考えてはみたがとても一言では言い表せないため、この場を借りて「私の体験した中高生プログラム」を振り返ってみよう。●初めのうちは、とにかく中高生の反応が気になって仕方なかった。投げかけた問いに首を傾げて黙ってしまったり、お互いの様子をうかがってみたい。そんな反応にやきもきする時間も多かった。少し意識が変わったのは、第2回の後の「発見ノート」を見た時だ。短い時間の中で、シュルレアリスムの難しい概念をきちんと受け止めていたことに驚いた。彼らは表情や態度にあらわれている以上に、色々なことを考え、感じてくれていることに気づいた。2人のアーティストとの出会いの場では、引きこまれたように作品に見入る新たな一面を見ることができた。保護者の方とお電話でお話した際、「家でいつも楽しかったと言っています」と、思いがけず嬉しい感想を耳にすることもあった。そうやって一つずつ中高生の顔を知っていったが、なんといつても一番印象的だったのは「こども探検隊」の当日だ。中高生と小学生だけの世界の中、自分たちの力で企画をやり遂げた姿は頼もしく、眩しく見えた。●回を重ねるごとに彼らに対する印象が変わっていったことは、中高生だけでなく、私自身の変化をも反映しているのだと思う。外の世界と出会ったとき、すぐさま生じる分かりやすい反応だけでなく、まわり道をしながらゆっくりと消化していくような変化も起きていることに気づき、それも大事だと思えるようになった。●中高生にとってこのプログラムがどんなものであったか、私には表に見えている一部しかうかがい知ることができない。それでも、自分の世界の外側からたくさんの刺激を受け、自分の内側のモヤモヤと向き合い、一つのゴールを達成したこの夏の経験が、この先起きるたくさんの出会いと自分の変化を楽しむために、少しでも役立ってくれれば嬉しいと思う。

横浜美術館 教育普及グループ
鑑賞教育エデュケーター／学芸員

古藤 陽



? → !

横浜美術館 中高生プログラム2019
美術を体験しよう! 伝えよう! [記録誌]

発行
横浜美術館
教育普及グループ 教育プロジェクト
220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1

発行日
2020年3月

編集
プログラム参加の中高生有志
横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト

デザイン
NDCグラフィックス

撮影
加藤 健 (*マークのついた写真)

印刷
山陽印刷株式会社

【中学生プログラム参加者】

荒井 稀終(中学1年生)
宇佐美 友悠(高校1年生)
江澤 悠仁(中学1年生)
大竹 美緒(中学1年生)
オボニア 衣舞花(高校2年生)
川島 一晃(中学2年生)
北島 優斗(中学3年生)
北島 瑠菜(中学1年生)
木下 結菜(中学2年生)
齋田 百伽(高校2年生)
白石 陽大(中学2年生)
竹永 嵩一郎(中学3年生)
田中 あい(中学2年生)
田中 ゆう(中学1年生)
長谷部 ななみ(中学1年生)
本間 愛深(高校1年生)
丸山 莉奈(中学1年生)
村松 希祥(高校1年生)
渡辺 朋美(高校2年生)
渡辺 和子(高校1年生)

【スタッフ】

教育普及グループ主席エデュケーター
関 淳一
教育プロジェクトチームリーダー
端山 聡子
教育プロジェクト
古藤 陽 | 太田 雅子
北川 裕介 | 森 未祈
六島 芳朗 | 石塚 美和

【ボランティア】

稲垣 ひとみ | 沖田 紀子
神谷 千草 | 遠山 夏子
山田 勝臣

本冊子表紙は
中学生からのアイデアにより、
淺井裕介さんの絵に触った時の感触を、
土絵具を用いて再現したものである。
裏表紙には、講座最終回(9月8日)に
それぞれが中学生プログラムの感想を
丸い台紙に表現したものを使用した。
冊子タイトルは中学生の提案による。
※表紙を折り曲げたり強く擦ったりすると
土絵具が剥落する場合があります。

